まとめて話させる。

五　讀みの指導

1　指名讀

2　範　讀

3　黙　讀

4　指名讀

四　文の精査

天人はどうしたか。「しをしを」の意味

漁夫はどうしたか。「その代り」

天人は何としたか。

漁夫はなぜはづかしく思ったか。

劇の實際と本文との關係問答

五　文の話方

六　文の朗讀

七　文の書取（當日分の最後）

〔第四時〕

目的　終まで課して、天人が舞をしたことを押け、夢の樣に美しい韻文の情趣を知らしめるのである。

教授順序

一　文の內容

二　內容の問答

誰が歌ったのであるか。

黑い衣でまふとどうなるか。

白い衣でまふとどうなるか。

天人はどうしたか。

三　讀みの指導

1　指名讀

2　範　讀

3　通　讀

4　指名讀

四　文の精査

第一の歌　天人が黑い衣でまふと月は黑くやみになる。

「月の都」「そろひ」の意味

第二の節　天人は互に教をまもると云ふ事の語り聞、聞くと云ふ事になる。（百十天人の語）

「十戒」「まゝ語る」

天人はかうして語つて聞くばかりである。

そのあと、ちつとあと、天の方は黙り出すばかりだ。

第三の節　右の者はひゝへんなものが語つて来つゝある。（百十一節）

「ひゝへん」「来つゝ」

第四の節　自ら語りは出来ないが出来ないと云ふばかりだ。

「出来ない」

第五の節　しかるに天人は善の語りつゝまれるばかりだ。

善のかたち

第六の節　その時のものゝ中には百十二人の三倍ばかりの来つゝあつたとあるばかりだ。

「ものゝ」「十二人」「はゝの」

第七の節　第一の節第六の節は天人の中でいゝ事をそなへたのである。

ちつとも変は無いが、

女はちつとも変は無いが。

貳　文の語

文の語

語句の説明

一　語句を文に説き、聞くの意味で語り語り中に自然に説かるわかり者も出る事にすぎない。

二　ムニーは物の語りの意で語つてゐるが、手段の語方が変りて天十分の者には物の説明の場合がある。

〔第　五　節〕

要旨　文の語句説明をし、次に説明になれしかして文義を説かるのである。

語句説明

一　文の説明

様々に説明をする。そして次に説明になれをするのである。

二　内容の語方と文語

ちつとも語が、まゝかつて二、三人に語をする。

この文はちつとも文が（語の語を使いた文であるこゝ。）

三　文の説明

一　非常説明

二　説明及び説明（又はムニード）

三　説　明（自ら出は様々に説明をする）

4　指名讀　數名

四　讀後の感想問答

1　どういふ處が事實の上で面白いか。

2　どういふ所が文として面白いか。

五　本文の構成と劇との關係

1　本文即ち劇的の文形と普通文との關係問答。

2　劇の事實と本文との關係（合唱・對話・獨唱・合唱の順序方法等。）

3　韻文の面白味と歌（次の事項を意識させる。）

讀み句調がよくて面白いこと。文句がそろつてゐること。

美しいことばで書いてあること。中のことばが面白いこと。（劇では之を歌に歌ふべきこと。）

4　對話の面白みと朗讀の注意

5　劇における仕種（しぐさ）とパツタ

指導上の注意

一　本時間は朗讀を主とし、これによつて文の情趣を深からしめるのである。一度學校で教へたら家においても繰り返し自然に讀む樣にさせるがよい。

二　韻文をノートに書かせるには本の過りに倣へて書かせるがよい。さうするとノートの下の方があくけれども、それには線をかゝせればよい。何にしてもノートを汚く使はせることをしないで、いつ見ても心持よく、整頓して書く樣にさせるがよい。縁りよく美しく書いてあり、又クレヨンなどで念を入れた繪が書いてあると子供も自然にノートを大切にする。

三　本文は劇として次の脚本によつて演出させなければならない。

參考資料

羽衣

風早の三保の浦わを漕ぐ舟の漁人櫂や波路かな。「これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。高嶺の紅山に雲忽ちに起り、一樹の明月に雨初めて晴れり。げにのどかなる時しもや。春のけしき松原の、波立ちつゝく朝霞、月も殘りの天の原、及びなき身の眺めにも、心そらなる景色かな。忘れめや山路を分けて清見潟、遙かに三保の松原に、立ち連れいざや道はん、立ち連れいざや道はん。風むかふ、雲の浮波立つと見て、雲の浮波立つと見て、釣せで人や歸るらん、待て暫し春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の緑ぞかし、波は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな、釣人多き小舟かな。「われ三保の松原に上り、浦の景色を眺むる處に、虛空に花降り音樂聞え、靈香四方に薫ず。これたゞ事と思はぬ處に、これなる松に美しき衣掛れり。寄りて見れば色香妙にして常の衣にあらず、いかさま取りて歸り古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

「なうその衣は此方のにて候。何しに召され候ぞ。「これは拾ひたる衣にて候程に取りて歸り候よ。「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず、もとの如くに置き給へ。「そもこの衣の御主とは、さては天人でましますかや、さもあらば本性の奇特に惜め置き、國の寶となすべきなり、衣を返す事あるまじ。「惜しやな羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に

飾らん事も叶ふまじ、さりとては返したび給へ。

この御言葉を聞くよりも、いよいよ白鳥力を得。もとよりこの身は心なき、天の羽衣とり隠し。叶ふまじとて立ちのけば、今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、上らんとすれば衣なし。地に又住めば下界なり。とやあらんかくやあらんと思しめど、白鳥衣を返さねば。力及ばず。せん方も。

長の露の玉かづら、かざしの花もしをしをと、天人の五衰も目の前に見えてあさましや。天の原ふりさけ見れば霞立つ。雲路まどひて、行方知らずも。住み馴れし空にいつしか行く雲の、淡ましきけしきかな。地殿瓔珞の馴れなれし、地殿瓔珞の馴れなれし、懐今宴に飾かなる、瓔珞ねの帰り行く、天路を聞けばなつかしや。千鳥鳴の沖つ波。行くか帰るか春風の、空に吹くまでなつかしや。空に吹くまでなつかしや。

「いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候程に、衣を返し申さうずるにて候。「暫く、乗り及びたる天人の舞楽。唯今こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし。「嬉しやさては天上に帰らん事を得たり。この悦びにとてもさらば、人間の御遊の形見の舞。月宮を廻らす舞曲あり。唯今こゝにて奏しつゝ、世の憂き人に舞ふべしさりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとてはまづ返したび給へ。「いやこの衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にや上り給ふべき。「いや疑ひは人間にあり、天に偽りなきものを。

あら恥かしやさらばとて、羽衣を返し與ふれば。少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし。天の羽衣風に和し、明に調ふ花の袖、一曲を奏で、舞ふとかや。

東遊の駿河舞。東遊の駿河舞この時や、始めなるらん。それ久方の天といつば。二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて。久方の。空とは名づけたり、然るに月宮殿の有様、玉殿の修理とこしなへにして。白衣黒衣の天人の、数を三五に分つて。一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。われも数ある天少女。月の桂の身をわけて、個に東の駿河舞、世に伝へたる、曲とかや。春霞、たなびきにけり久方の。月の桂の花や咲く。げに花かづら色めくは春のけしかや。面白や天ならで、こゝも妙なり天つ風、雲の通ひ路吹きとぢよ、少女の姿、暫し留まりて、この松原の、春の色を三保が崎。月清見潟、富士の雪、いづれや春のあけぼの。霞ひなみも松風も、のどかなる浦の有様。その上天地は、何を隔てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も替らぬ日の本や。君が代は、天の羽衣まれにきて、撫づとも盡きぬ巌ぞと、聞く妙なり東歌、響絶へて数々の、笙笛琴琵琶風雲の外に充ち満ちて、落日のくれなゐは華嚴路の山をうつして、緑は波に浮島が、鶴ふ嵐に花開りて、げに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。

南無帰命月天子本地大勢至。東遊の舞の曲。

或は、天つ御空の数の衣。又は春立つ霞の衣。色香も妙なり少女の装束。左右左。さいふさつさつの、花をかざしの天の羽袖。靡くも返すも、舞のそで。

東遊の数々に、東遊の数々に、その名も月の色人は、三五夜中の、空に又、満月氣知の影となり、御願圓満国土成就、七宝充満の宝を降らし、国土にこれを、施し給ふさるほどに、時移つて、天の羽衣、浦風にたなびきたなびく、三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺、かすかになりて天つ御空の霞にまぎれて、失せにけり。

補充材料　兒童劇（羽　衣）

一　題目　羽　衣

二　要旨

謡本に脚色して劇として演出させるのである。尚ほ手工・圖畫とも聯絡してパックをも作らせる。

三　[illegible]

一　目的の指示
二　脚本の朗讀
三　内容の問答
四　脚本の鑑賞
五　バックの製作（富士をバックにした三保松原）
六　脚本の讀方練習と所作事の指導
七　實演

脚本

羽衣

正面には富士の嶺が夢の樣に雲の上に浮んでゐる。前は三保の松原、羽衣松は近くこちらに立つてゐる。その松には羽衣がかけてある。

幕が開くと靜に音樂が聞える。二度くり返す時に樂屋から歌が美しく流れて來る。（曲譜は別記）

合唱　「白いはまべ　の　松原に、
　　波がよせたり返したり。
　　かもめすい〳〵とんで行く、

　　雲にかすんだ富士の山。」

　　一人の漁夫が出て來る。そして立ち止り、あたりをながめて、

漁夫　「あゝ、よいお天氣だ。さうして、まあ、何といふよいけしきだらう。」

　　かういつて景色を見ながら歩き、又立どまつて、

　　あゝ、富士が美しいなあ。まるで繪の樣だ。あゝ、あの松の色、何といふ美しい色だらう。あの青い波、まるでるりの玉をとかした樣ぢやないか。」

　　かういつて又歩き出すと、又立どまり、

漁夫　「あゝ、變なにほひがする。何だらう。あゝ、にんとによいにほひだ、何の香りだらう。いったい、どこから來るんだらう？

　　おや、あの松の枝に何かかゝつてゐる。あれは何だらう。」

　　松の根本に行く。

漁夫　「うむ、着物らしい、何といふよいにほひだらう。こゝからいい香りが來たんだな。だが、こんな着物は見たことがない。一體だれが着るのだらう。」

　　りつぱだ〳〵。よし〳〵、これは持つてかへつてうちのたからものにしよう。それがいい〳〵。」

　　漁夫は衣をとつて持つて行かうとする。

　　すると、そこへ木の後から天人が出る。

天人「もし〳〵、それは私の着物でございます。どうしてお持ちになるのでございますか。」
漁夫「いや、これはわたしが今拾つたのです。もつてつてうちの寶物にしようと思ひます。」
天人「それは天人の羽衣でございます。あなたがお持ちになつてもあなたがたには御用のないものでございます。どうぞ私にお返しして下さいませ。」
漁夫「えゝつ、これが天人の羽衣ですつて。そんなら尙更お返しはできません。もつてかへつて日本の寶にいたしませう。」
天人「いえ〳〵、それがないと私は天へかへることができません。どうぞ私にお返し下さいませ。」
漁夫「いや、いけません。何といつても返されません。」
天人は悲しく空を仰いで、涙ぐむ（兩手を眼にあてる）
漁夫はじつと天人の樣子をみつめる。
漁夫「もし〳〵、どうなすつたのでございますか。」
漁夫しばらく考へて、
漁夫「それほどおつしやるなら、お氣のどくですからお返しいたしませう。」
天人「うれしい〳〵。それはありがたうございます。ではこちらへいたゞきませう。」
漁夫「一寸お待ち下さい。私は今羽衣をかへしますからその代り、どうぞ天人のまひをまつて下さいませんか。」
天人「おかげで天にかへられます。それなら、おれいに舞をいたしませう。でもその羽衣がないとまふことが出來ません。」
漁夫「といつて羽衣をお返ししたら、あなたは舞はずにかへつておしまひになるでせう。」
天人「いゝえ、天人はけつしてうそを申しません。」
漁夫「あゝ左樣でございますか。これは誠に恥しいことを申しました。」
漁夫が羽衣を返すと天人は之を身につける。
そして樂の音につれて歌ひながら舞ふ。
獨唱「月の都の天人たちが
黑い衣のそろひでまふと、
月はまつ黑やみの夜

月の都の天人たちが
白い衣のそろひでまふと
月は十五夜まん圓い」
つゞいて空に高く舞ひ上ると樂屋から次の歌が流れる。
漁夫はこれを不相變見つめてゐる。
合唱「右に左にひら〳〵と、

二十一　朝　　衣

動くたもとの美しさ。

白いはまべの松原に
波が寄せたり返したり。

いつのまにやら天人は
春のかすみに包まれて

かもめすい〳〵とんで行く
空にほんのり富士の山。

――――――――幕――――――――

注意

一　歌の曲譜は適宜に此の心持を出すものを選んではしい。レコードを使つても差支ない。

二　舞踊は極めて簡單にするがよい。

三　劇詞は大體原本によつたけれども幾分變つてゐる。原本そのまゝでも差支ない。

昭和九年九月廿七日印刷
昭和九年十月二日發行

著作者　小林佐源治

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目一番地　株式會社三省堂　代表者　飯井實雄

印刷所　東京市蒲田區出雲町一〇一番地　株式會社三省堂蒲田工場

發行所　（東京市神田區神保町一丁目一番地）株式會社三省堂
（大阪市西區阿波座下通三丁目六番地）株式會社三省堂大阪支店

小學校・師範學校・高等女學校・中等學校・實業學校用
新指導書
定價金貳圓

9. 9. 28

好評喧々の指導書

東京高等師範學校附屬小學校 小林佐源治著

小學國語讀本新指導書

第一前期用	四一六頁	菊判・布裝・函入
第一後期用	四九〇頁	定價各卷二圓
第二前期用	四一六頁	（送料各十二錢）
第二後期用	四一〇頁	

本書は新國語讀本編纂の趣旨と國語教育の本旨とに照つて新國語讀本の要旨を述べ、教材の本質を究明し、如何に指導すべきかを詳說したもので、各課毎に教材、要旨、教材觀、指導觀、解說、備考等を述べた。從つて小學教員諸氏は之によつて國語教育の根本的方針を記憶し得るのみならず、實際の授業の場合に最もよい指導者、忠告者を持つ譯である。

三省堂發行

B—104

國語教育の大寶典

東京文理科大學教授 神保格 共著
日本女子高等學院教授 大西雅雄

國語の標準發音

國語の標準發音を發音學的に正確に說明したもので、國語の初等教授者に對する唯一の好文獻である。取材を多く新國語讀本より引例したる故、小學國語教授者は是非一讀の必要がある。

四六判・クロース裝 八〇頁 定價八十錢 送料四錢

東京文理科大學教授 神保格 共編
日本女子高等學院教授 大西雅雄

國語標準音圖表

（國語の標準發音掛付）

壁掛・中・大 全紙 厚紙 平・小型 全紙 八圖

定價五圓

學校では標準音を敎へる筈になつて居ても、動もすれば地方音を敎へ勝ちになる。本書圖はこゝに盡み現代發音學上の知識を駆使して五十音の發音方法を科學的に說明してある。

三省堂發行

E—94

三省堂の掛圖

三省堂編輯所編

小學國史教授用掛繪圖

縱三尺一寸・横二尺一寸・特製耐久用紙・特製掛木

尋常用
- 第一輯　二十枚　四十六圖　定價七圓
- 第二輯　二十枚　四十二圖　定價七圓
- 第三輯　二十枚　四十二圖　定價七圓

本教圖は專ら日本精神の徹底に重點を置き、國史教育の大家及び斯道に多年の經驗ある實際教育家の協議を經て、實際に役立つ最又最新なる考證により正確なるものを、一流の畫伯の圖案により描かれたもの、而かも眞實の精神に基ひ、各種の教授方法を用ひ、精神の徹底によりて眞實を再生し、進歩より見ての效果も之を大ならしむるやうに努力されてゐる。

三省堂發行

B—106

363
571